

皆様、本日は秋季大祭おめでとうございます。

先程は、成井理事長より、お心のこもった、力強いご挨拶をいただき、また、〇〇さんより、明主様のみ心を素直に実践される中での貴重な感謝奉告をご発表いただき、ありがとうございました。

私は、①之光教団の皆様が、私の言葉を通して明主様のみ心、明主様の主神に対するみ心を求め、明主様を模範として主神に心を向けてくださっておりますことに、大変勇気づけられ、皆様と共に、同じ一つの道を歩ませてもらっているという感謝でいっぱいです。

さて、誠に恐れ多いことではありますが、明主様が「言<sup>げん</sup>霊<sup>れい</sup>神<sup>かみ</sup>也<sup>なり</sup>」という御書をご揮毫になりましたように、言葉の霊、すなわち、言葉の源は唯一の神・主神であります。

言葉は必ず思いと共にあり、思いは必ず言葉と共にあります。

思いの伴わない言葉などなく、言葉の伴わない思いなどありません。

言葉の源である主神、すなわち、思いの源である主神によって天地万物一切が創造されました。

ですから、創造されたすべてに、主神の言葉が宿っています。主神の思いが宿っています。

主神の思いは、私ども人類をご自身の子とするということです。これは主神の厳然たるご意志であります。

主神は、私どもをご自身の子とするために、ご自身の思いの表現である言葉をもって常に私どもに働きかけてくださり、私どもを養い育て、私どもと思いを通わせることができるように努力してくださっています。

私どもが、何かに気づき、何かを思うことができるのは、主神がご自身の言葉をもって私どもに働きかけてくださっているからです。

しかしながら、私どもは、私どもの源である天国で、主神の言葉をお預かりしていたにも拘らず、言葉を自分たちのものとし、言葉の源である主神に心を向けることを忘れ、自分たちにとって都合のよい目的のために言葉を使ってまいりました。

私どもは、自分が神様のことについて、ほんの少しでも気づくことができた時、知ることができた時、喜ぶと同時に、それを相手にも知らせたい、知らせなければと思います。

それは、大変尊く、大切なことであると思います。

しかしながら、自分が知り得たことを相手に伝えようとする時、もしかしたら、その言葉を自分の徳を高めるために、自分の評価や価値を高め、自分を相手よりも優位に置くために使っていないかどうかと考えますと、そういう思い上がりが私どもの中にあるかもしれないと思います。

私自身について申せば、その思い上がりが確かに私の中にあったと認めざるを得ません。

私は、私が気づき、感じさせていただいたことを、皆様にお伝えすることが私の務めであると思っておりますが、皆様にお伝えさせていただくにあたって、主神のお赦しをいただいた上で、皆様にお伝えしていたかどうか、自らを省みざるを得ません。

私自身、言葉の源である主神に対する礼儀を充分にわきまえていたとは言えないような気がいたします。

そのように思い上がった私であっても、主神は、私が大切だと思ったことについて皆様にお伝えすることを赦してくださっていました。

そして、主神が私を赦してくださっていたのは、私を忍耐強く養い育ててくださり、ご自身の子供としてくださろうとしているからなのだ、とつくづく思わせていただきました。

主神は、すべてのものと共に、私を、明主様と共にあるメシアの御名にあって赦してくださいました。

ですから、私は、明主様を通して臨んでこられる主神の思いを、皆様の代表としてお受けさせていただくとともに、私が気づかせていただくことを皆様にお伝えする時には、主神に対して、皆様にお伝えしてもよろしいでしょうか、と常にお尋ねしなければならないと思わせていただきました。

そして、主神に対し、“もし行き過ぎや間違ったところがあればお赦しくくださいますように、また、足りないところがあれば補ってくださいますように、”と申し上げ、“わたしの思いでなく、あなたの思いが伝わりますように、”と申し上げなければならないと思わせていただきました。

私は、明主様がメシアという御名を大変大切にされたということを、皆様に繰り返しお伝えさせていただいております。

それは、メシアの御名が主神にとって大切な御名だからです。

主神は、ご自身の子たるメシアの御名を、私どもの源である天国において、ご自身のすべての分霊わけみたまの中に刻み込んでくださいました。

私どもは、天国から地上に遣わされたものとして、このメシアの御名を思

い出し、認めることができるようにさせていただいているのです。

しかしながら、私どもの中には、このメシアの御名を認めようとする思いだけではなく、認めようとしなない思いがあります。

なぜならば、地上に遣わされた私どもは、先祖代々、長い間、人間を主体とするような歩みをしてきたために、主神が私どもを分け隔てなく赦し、ご自身の子たるメシアとするという、主神が主体となった働きを受け入れることは、人間にとって都合が悪いことだからです。

主神は、こうした私どものメシアの御名を認めない思い、人間主体の思いを赦してくださいました。

それだけではなく、メシアの御名を認める思いも認めない思いも、そうした思いを自分たちの思いとし、自分たちの価値としていた私どもの思い上がりをも赦してくださいました。

ですから、私どもの中にあるメシアの御名を認める思いも認めない思いも、その相反する二つのものを一つのものとして赦してくださったことに感謝し、すべてのものと共に、明主様と共にあるメシアの御名にあって、赦され、救われたものとして、天国に立ち返らせていただくことが私どもの務めではないかと思えます。

明主様は、今から63年前の昭和29年4月19日、突然脳溢血の症状を起こして倒れられました。

その後、6月5日、主だった資格者を熱海の碧雲荘に招集され、メシアが生まれたこと、そして、生まれ変わるのではなく、新しく生まれる、という御言葉を発せられました。

明主様は、この翌年の昭和30年2月10日にご昇天になりましたが、私は、明主様が脳溢血の症状で苦しんでおられる中であっても、わざわざ当時の幹部の方々を招集されて、御言葉を発せられたということは、この時の御言葉がいかに重大な意味を持つものであるかを示していると思えます。

明主様は、この時、メシアが生まれたことを、言葉だけではなく、事実であるとされ、「生まれ変わるというんじゃないですね。新しく生まれるわけですね」とお述べになっているのです。

明主様ご自身が重大な意味を持つ御言葉の中で、「新しく生まれる」のことであって、生まれ変わるのではない、と仰せになっているのです。

私どもは、明主様ご昇天後、この生まれ変わるのではない、という御言葉の意味を進んで求めようとしなないまま、今日まで、この御言葉を避け、正面から向き合っただけでこなかったような気がいたします。

しかしながら、私どもは明主様を信ずる信徒であります。

明主様の信徒である以上、メシアが生まれたという重大なご発表の折に、この、生まれ変わるのではない、という御言葉が発せられたという事実を避けて通ることはできないのではないのでしょうか。

この御言葉を通して、私どもの本質は生まれ変わる存在ではないということを、明主様が新しくみ教えくださった、と私は思えてなりません。

生まれ変わるということについて、仏教では、輪廻りんねてんしやう転生と言って、あらゆる生命が転々と別の形の生命に生まれ変わることを繰り返しながら、永遠に生きていくという考え方があります。

明主様も、「人間が生き更り死に代り何回でも生れ替ってくるのである」とお説きになりました。

確かに、先祖の方々と同様、地上に遣わされた私どもが地上に遺した遺伝的要素は、肉体を介在させながら、親から子へ、子から孫へと代々引き継がれていきます。

顔形を始め、体質、性質などが代々受け継がれ、また、それらが世代を隔てて現れる場合もあります。

その意味での「生まれ変わり」は確かに存在しており、私は、決して「生まれ変わり」を否定しているわけではありません。

しかしながら、先程申し上げました、昭和29年6月5日の明主様の御言葉をお受けし、改めて人間の命について考えますと、私どもが生まれ変わりがあると言う時、それは、限りある命、死を免れ得ない命を前提としているのではないのでしょうか。

私どもは、人の命は限りあるものと思い込んでいるからこそ、この世を去った後、再び地上に戻ってくると考えるのではないのでしょうか。

このように、私どもは、死を免れ得ない命、人は必ず死ぬという命しか知りませんでした。

明主様は、「魂機張る命の主は己にあらで神の御手にあるを知れかし」というお歌をお詠みになっておられます。

すべてのものは、永遠の命であられる主神によって創造されたものです。

すべてのものは、主神の命に満たされています。

命に満たされていないものなど、一つもありません。

主神からご覧になれば、死んだり滅びたりするものなど、一つもありません。

しかしながら、地上に遣わされた私どもは、自分の中に主神の永遠の命が

宿っていることを忘れ、命を自分たち人間のものとして生きてきたがゆえに、その命は死を免れない命にならざるを得なかったのではないのでしょうか。

私どもは、主神からご覧になれば、生きているものではなく、死んだもののようになっていたのではないのでしょうか。

そうした死んだもののようになっていた私どもを、明主様は救ってくださいました。

昭和29年6月5日の御言葉が今、私どもを救ってくださいました。

主神は、明主様を、私どもと同じように、永遠の命に満ち満ちている天国から、死に囚われていた世界である、この地上にお遣わしになりました。

明主様は、私どもと同じように、この地上でのご生涯を送られる中で、私どもの代表として、命をご自分のものとしていたことを悔い改められ、メシアの御名にある主神の赦しをお受けになりました。

そして、命の源である天国に立ち返られて、ご自分のものとしていた命、死を免れ得なかった命を主神に捧げられ、改めて主神の命を新しい命、永遠の命としてお受けになり、主神の子たるメシアとしてお生まれになりました。

明主様は、私どものために、過去、現在、未来の人類のために、悔い改められ、メシアの御名にあって赦され、救われたものとして天国に立ち返られて、新しくお生まれになったのです。

明主様は、死を免れ得ない命に囚われていた私ども全人類を救い出すために、新しい命に甦られたのです。

それは、主神が死に囚われていた私ども全人類を、赦し、救い、甦らせ、すべてのものと共に、ご自身の子たるメシアとして新しく生まれさせ、共に天国に住まわせるためです。

私どもは、明主様と共に、新しい命に甦らせていただいたのです。

私どもは、もはや死んでいくものではなく、生きたものにならせていただいたのです。

明主様が、お歌に、「永久とこしえに人の生命はあるものと知りて初めて人たる人なり」とお詠みになりましたように、私どもは、自らの中に、初めから主神の永遠の命が存在していることを知るものにならせていただきました。

改めて申し上げます。

明主様は、生まれ変わるのではなく、新しく生まれる、と仰せになりました。

その御言葉を賜ったものとして、私どもも、明主様に倣って、生まれ変わるのではなく、新しく生まれるものにならせていただきましょう。

終わりに、今後とも、私は、明主様の全く新しい信仰を全身全霊にお受けになって進んでいかれることを固く決意しておられる成井理事長、そして、理事長を中心とする④之光教団の皆様の真心にお応えし、皆様と共に、全人類とその父母先祖の方々、また、これから地上に遣わされる方々と共に、そして、万物と共に、明主様と共にあるメシアの御名にあって、主神にお仕えさせていただきます。

ありがとうございました。

以上